

特集 ①

理事座談会

変わる 三重大学

～法人化が私たちに問うもの～

渡邊 悌爾

福島 健郎

山田 康彦

森野 捷輔

亀岡 孝治



森野 捷輔
理事・副学長（研究担当）



亀岡 孝治
理事・副学長（情報・国際交流担当）
附属図書館長

競争時代をどのように勝ち抜いていくのか

亀岡 法人化の前後でもっとも変わった点は、競争の時代を勝ち抜いていくための戦略を描く必要があるということです。従来のような「待ちの姿勢」「受けの姿勢」では、これからは生き残れないと思いますがいかがでしょうか。

渡邊 確かに従来は「管理運営」というニュアンスでしたが、今後は「組織経営」という形に脱皮していかなければなりません。その実現に向けて、教職員一人ひとりの意識・行動が変わる必要があります。

福島 そうですね。法人化によって、以前は細かく用途が制限されていた運営費交付金が、自由に使うことができるようになりました。つまり各大学の財務運営については、自由度が増したわけです。しかしそれは、管理責任も増したことを意味します。また、法人化により、運営費交付金は毎年減額されていきます。これまで以上に経費を効率的に執行しながら、組織の再編や魅力づくり・運営全般にわたる改革を推進していくことが必要となってきます。

亀岡 情報・国際交流の観点からの学内の運営改革としては、2点の考えがあります。一つはユビキタスキャンパスの構築。大学の活動や研究をデジタル化して蓄積し、いつでもどこでも取り出せるようにする。もう一つは海外大学の先進事例の研究。特にヨーロッパやアジアの大学では、日本がこれからやろうとしていることのお手本となる事例がたくさんあります。

山田 ユビキタスキャンパスについては、教員と学生の双方向的な学習スタイルをつくりあげていく上でも教育の面でも有意義なことだと思います。

変えるべきこと 変えてはいけないこと

森野 財政が厳しくなる中、研究のあり方を見直す必要も出てくると思います。学部・学科の枠を超えた学際的な研究によって個性をアピールしたり、企業との共同研究や文部科学省の支援事業への応募などによって外部資金を獲得していくことがより重要になるでしょう。大学にとって、これまでは教育と研究が柱でした。これからはそれに社会貢献が加わります。企業のニーズと、大学のニーズをマッチングさせて共同研究に取り組み、成果を挙げていくことが求められます。しかし一方で、大学の研究機関としての本質が損なわれるようなことはあってはいけません。外部から資金を獲得しにくい基礎研究などについても、しっかりと続けていくことが非常に重要なことだと考えています。

福島 同感です。大学として守っていくべき教育・研究は守る。その点は、変えてはいけない部分です。併せて、全学的・戦略的な予算も確保していく。そのバランスをどのように図っていくかが、今後の大きな課題だと思います。

亀岡 変えてはいけない、という点で図書館長の立場での私が重視したいのは図書館です。本来、図書館というのは大学の顔なんです。ところが一般的に今、大学図書館は軽視される傾向にあります。情報化の波が書籍の世界にも押し寄せ、冊子体が情報体にとって代わりつつあるのがその理由です。学内の情報化、図書電子化を進める一方で、図書館の冊子体を守っていくことも、図書館長としての私の役割。特に三重大学の図書館は県の図書館と連携するなど、地域社会と密接に結びついているという点で全国でもリードしている有名な存在ですから。

渡邊 総務的な観点では、「大学評価・学位授与機構」や「国立大学法人評価委員会」により、大学の教育全体が評価される時代になったことも大きな変化です。

山田 教育という面では、これからは各大学が教育に対してミッションを持って、

そのミッションに向けて優れた高等教育を提供しているかどうか、優れた人材を輩出しているかどうか外部から問われるようになります。その中で私たちは「感じる力」「考える力」「生きる力」の養成を基本方針に「社会で実力を発揮できる学生の育成」に重点を置いた教育改革を進めています。主体的に問題を発見し、解決してく力を身につけてもらう教育ですね。医学部でPBLチュートリアル教育（※P4参照）を実施していることも、その一環です。また、学生による「教育満足度調査」に加え、卒業生の就職した企業による教育評価制度も取り入れています。

「地域圏大学」として 開かれた大学であり続けるために

渡邊 今までの話を集約すると、総合的な面で「社会から信頼される大学」にならなければならない、ということになると思います。地域に根ざし、地域とともに考え、地域の拠点となる「地域圏大学」として、開かれた大学であり続けることが私たちの使命です。

福島 産学共同研究や社会貢献をより活性化させるために2005年4月に「社会連携課」を新設します。この部署の課長は学外から公募します。企業や地域社会との連携をより円滑に進める上で、民間の経験者を配置する方が成果が上がると考えたことがその理由です。

森野 開かれた大学づくりについては、すでにさまざまな活動が展開されています。「知の支援センター（※1）」もその一つ。現在は1ヶ所ですが、さらにいろんな場所で展開していきたいと考えています。また現在、災害対策プロジェクトが、県との綿密なタイアップのもとで進められています。さらに、社会人のための公開講座や大学院教育についても、より充実させていきたいと考えています。それから忘れてはいけないのは病院です。地域医療を支えるという意味でも、そして「みえメディカルバレープロジェクト（※2）」においても病院は重要な役割を担っています。

山田 大学というのは、地域社会における知的財産です。蓄積した「知」を社会に還元していくことも私たちの大切な役割。たとえば高校生も大学の授業に参加できるような大学と高校の連携の仕組みも考えていきたいですね。

亀岡 広報を通じて、「三重大が変わった」というイメージを地域の人々に伝えていくことも重要です。この広報誌「ウェーブ三重大」のリニューアルもその一環ですね。他にホームページのリニューアルや、研究をわかりやすく紹介したシーズ集の作成なども進めています。

渡邊 最後に今日の話を総括したいと思います。これからは内部で取り組んできたことを広く情報発信し、社会の皆様へ評価していただく。その評価を踏まえて、次の大学づくりを考えていく。そういう大学に変わっていかねばなりません。この広報誌が、地域社会と三重大が共鳴し合うような関係づくりに役立ってくれたらと思います。

※1 知の支援センター

地域住民の皆様へ、三重大のさまざまな活動をより広く知っていただくために設置したインフォメーションセンター。みえ県民交流センター内にある。

※2 みえメディカルバレープロジェクト

三重県内の大学や研究機関、企業、サービス事業者などによる有機的なネットワーク（産業クラスター）を形成し、医療・健康・福祉産業の振興（メディカルバレー構想）に取り組み、活力ある地域づくりと県民の健康と福祉の向上をめざすもの。



渡邊 悌爾
理事・副学長（総務・企画・評価担当）



山田 康彦
理事・副学長（教育担当）



福島 健郎
理事（財務・経営担当）・事務局長